

糸島市立  
伊都国歴史博物館

紀 要

第8号



曾根古墳群の記憶 —航空写真に遺されたありし日の古墳たち—

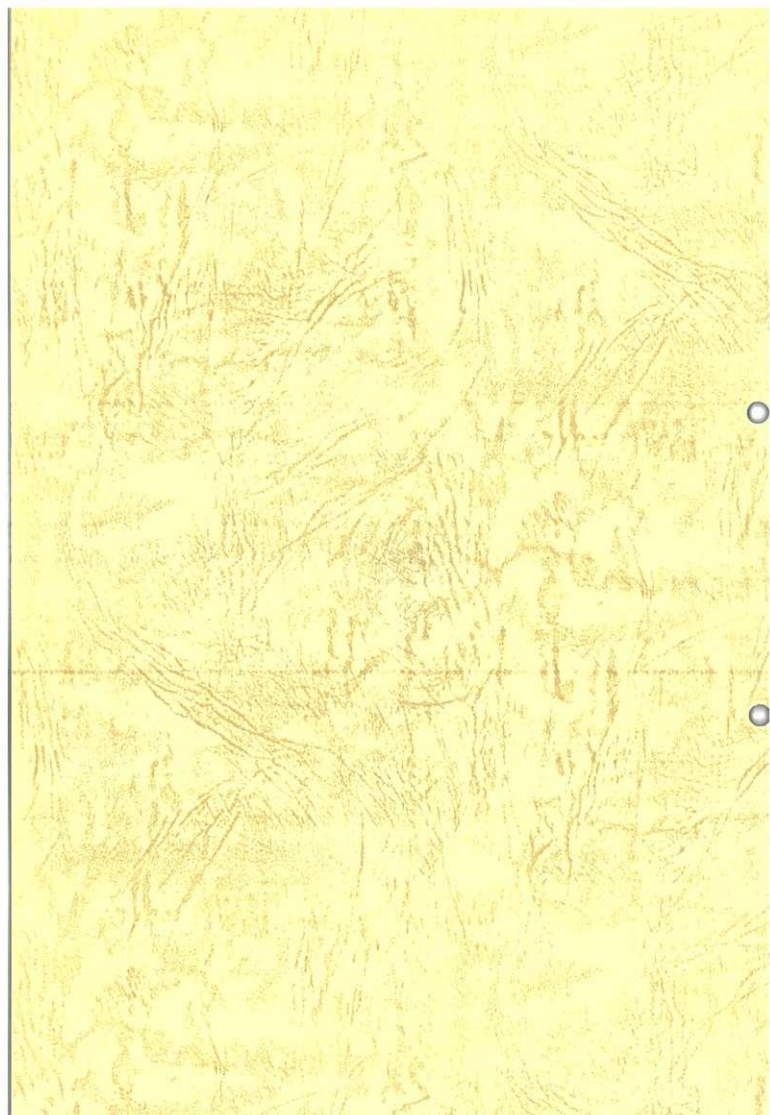
.....岡部裕俊 (1)

【史料紹介】

—貴山寂光坊青木家文書について—中世文書を中心に—

.....中牟田寛也 (一)

2013



## 序

糸島市が誕生し、はや3年が経過いたしました。

合併により、旧二丈・志摩町の歴史資料が当館に寄せられており、保管取蔵資料も増加してきました。これに対処すべく博物館の取蔵資料を整理し、電子目録の作成に取り組むなど、糸島市の歴史文化を伝える中核施設として、その使命を果たすため、今後とも精進してゆきたいと考えております。

本年度からは、中近世史を専門とする学芸員が新たに配置され、当該時代の調査や研究にも新たに着手するなど、業務内容の一層の充実にも取り組んでいるところです。

その一環として、本書では早速、一貴山青木家に伝わる中世文書の資料紹介を掲載いたしました。調査によって歴史的に重要な史料であることが明らかとなり、本年度末には新たに糸島市の文化財に指定される運びとなりました。

また、志摩稲留で新たに発見された経筒に関する報告では、糸島半島で初めて確認された経塚関連資料であることが確認され、糸島地方の山岳宗教の歴史を研究する上での新たな情報と課題を提示することとなりました。

さらに、曾根古墳群の古い航空写真の発見を端緒とする報告により、これまで詳細がわからなかった2基の前方後円墳について、初めて具体的な情報を示し、併せて曾根古墳群における評価を報告することができました。

本紀要が、糸島地方の歴史研究の基礎資料として、広く活用いただければ幸いです。

平成25年3月31日

糸島市立伊都国歴史博物館

館長 榊原英夫



## 曾根古墳群の記憶

—航空写真に遺されたありし日の古墳たち—

岡部 裕俊（伊都国歴史博物館）

### 1. はじめに

糸島地方には60基にのぼる前方後円墳をはじめとして総数1,000基ほどの古墳が分布することで知られている。

全長103mを測る玄界灘沿岸では最大規模を誇る一貴山銚子塚古墳を筆頭に井田原岡古墳（92m）、丸隈山古墳（85m）、端山古墳（周溝を含む全長100m）など、北部九州では大型に属する4～5世紀の前方後円墳が集中し、また、今宿平野を望む南の丘陵地帯には500基近い後期群集墳が集中するなど、古墳時代全般を通じて多くの古墳が築造された。

さらに、4世紀後半には竊鈿古墳で横穴式の埋葬施設が導入されるなど大陸の文化要素をいち早く受容する先進性も垣間見せるなど、古墳研究上の重要古墳が多く残された地域である。

さて、今回紹介する曾根古墳群は、糸島地方の平野のなかで最も広い怡土平野の中央部に立地する古墳群である。雷山（標高951m）の裾から総延長4kmにわたって北に延びている曾根丘陵（第1図）上にある。広大な面積を有する丘陵であるが、天然の水利に乏しかったことなどに起因して、有史以来、集落など人々の主たる生活の場として利用される機会は極めて少なかった。

しかし、戦後に、農家の新規入植が奨励されたことにより、畑の開墾など徐々に開発の手が加えられるようになった。昭和40年を迎えると、民間主導の宅地造成が急ピッチで進められたことが開発に拍車をかけ、原野→農地→住宅地へと劇的な変化を遂げることとなった。これとともに当地に所在した埋蔵文化財にも少なからず影響が及ぶこととなった。

1979（昭和54）年には、前原町に文化財の専門職員が配置されたのを契機として、その保護に積極的に取り組むこととなる。ほどなく、1982（昭和57）年には丘陵の北端にある平原遺跡および曾根古墳群が、弥生～古墳時代にかけての当地の拠点集落であった三雲・井原遺跡との不可分の

首長墓群として評価され、伊都国の興亡を知る上で貴重な文化財群として「曾根遺跡群」と総称され国史跡に指定された。

しかし、残念ながら、すでにこの時点で先山古墳や高上大塚古墳など貴重な古墳が、調査が行われることもなく破壊の憂き目に会い、幻の古墳と化していた。

さて、時は移り、平成22年に福岡県教育委員会が保管していた図面や写真など糸島市域の文化財調査の記録類が大量に返還され、博物館がその受け入れの窓口となった。

博物館では、写真記録をデジタル保存するなど整理を進めたが、その中から1960（昭和40）年に行われた平原遺跡発掘調査の航空写真が発見された。（写真11）平原遺跡の発掘調査当時の周辺の地理的環境や調査の様子を伝える貴重な資料である。それとともに曾根丘陵上の古墳群を撮影した写真も撮影されており、消滅した先山古墳や高上大塚古墳とみられる写真も含まれていた。

そこで、ありし日の曾根古墳群の航空写真を紹介するとともに、狐塚、銭瓶塚、ワレ塚、各古墳のこれまでの調査の成果を概観する。また、消失



第1図 曾根古墳群の位置

した先山、高山大塚古墳に関する情報もまとめ、最後に曾根古墳群の現状における歴史の評価について触れてみたい。

## 2. 曾根古墳群の調査の足跡

さて、曾根丘陵上の古墳については、古くは江戸時代に記された記録が残されており、その後、たびたび地誌などでも紹介されている。

また、1980年代以後は、古墳の保護や整備に向けての事前調査が行われ、各古墳の詳細が徐々に明らかになってきている。

そこで、まずはじめに、過去の記録や調査成果を紹介し、続いて個々の古墳の調査成果と航空写真の比較検証を行い、あわせて先山古墳と高上大塚古墳について資料の整理を行いたい。

### (1) 『筑前国續風土記附録』

曾根古墳群に関する最も古い記録としては、加藤一純・鷹取周成が著わした標記の書(註①)がある。文政年間まとめられたとされており、「井

原村—曾根原古戦場—」の中に、以下のとおり曾根古墳群の記録がみられる。

「原の(野か?)に十三塚とて小さき塚南北に相並へり。其内平地に名残れるもあり、其外にも穴塚地塚ともいふ。十二三、三雲村に境へる所にあり。口は南に向う。其内鐘撞塚とて穴のなき塚あり。狐塚、ツルベ塚、ゼニガメ塚といふもあり」

当時は、曾根丘陵上に十数基の「塚」が残っていたことが記されており、狐塚、ゼニガメ塚など現存する古墳の名がみえる一方、鐘撞塚、ツルベ塚などは確認することができない塚の名もみられる。

「十三塚」の存在が記されていることから、十三仏信仰に基づく盛土濠溝なども存在した可能性があるが、現在、それと認識できる遺構は残っていない。ただし、大正4年の地籍図では、井原、歳持地区と境を接する曾根地区の南西隅に「十三塚」の小字を確認することができた。

また、同地籍図には、狐塚古墳の南側に「念佛塚」の小字も認められるが、詳細は不明である。



第2図 前原町文化財地図(前原町文化財地名表付図)に加算 (1/25,000)  
97は先山古墳、98はフネ塚(曾根2号)古墳、99は銭塚古墳、100は曾根4号墳、101は狐塚(曾根5号)古墳

### (2)『一貴山鏡子塚古墳』

1952(昭和27)年に刊行された一貴山鏡子塚古墳の発掘調査報告書(註②)には、森貞次郎が実施した現地踏査の成果として、糸島地方の16基(怡土村8基・周船寺村4基・一貴山村2基・前原町2基)の前方後円墳の分布状況が報告されている。

個々の古墳名は明示されていないが、地図に示された位置関係から曾根古墳群では、ワレ塚、銭瓶塚、狐塚、高上大塚古墳が表示されたものと考えられる。

なお、森は狐塚古墳を前方後円墳(帆立貝形前方後円墳)と推定したが、後年の発掘調査において円墳であることが確認されている。

### (3)『前原町文化財地名表』

1973(昭和48)年に前原町教育委員会が発行(原田大六監修)した文化財の分布地図(註③・第2図)では、前原町内に15基の前方後円墳が表示されている。曾根古墳群については、先山、曾根2号(ワレ塚)、銭瓶塚、曾根4号(円墳)、

曾根5号(狐塚)、曾根6号(円墳)、高上大塚等が表示されているが、先山古墳と高上大塚古墳には「壊滅」と但し書きがあり、地図が作成された時点ではすでに消失していたことがわかる。

この一連の分布調査の成果には、糸島高校歴史部の踏査の成果もふんだんに盛り込まれており、同時期に刊行された『糸高文林』第12号には、当時高校生として活動に参加した日高光子、水崎しのぶ氏によって曾根2号墳(ワレ塚古墳)出土の円筒埴輪が紹介され(註④)、現在も糸島高校郷土博物館で見ることができる。

### (4)『三雲遺跡Ⅲ』

1982(昭和57)年に刊行された『三雲遺跡Ⅲ』(註⑤)において、柳田康雄氏は、端山、築山古墳の発掘調査成果の報告文の前段に「糸島の古墳文化」の項を設け、糸島地方における河川水系、平野などを単位とする古墳の分布と変遷について詳説した。この報告によって糸島地方の前方後円墳の数は飛躍的に増加した。

柳田氏は、ワレ塚、銭瓶塚、狐塚古墳を5世紀



写真1 曾根丘陵の俯瞰(南から)

前半～中頃、高上大塚古墳を5世紀後半の築造と推定し、4世紀代に築造された端山、築山古墳に後続する怡土平野の首長墓群と位置づけた。この首長墳の変遷は現在でも大筋で支持されている。

### 3. 曾根古墳群の航空写真と調査の成果

#### (1) 昭和40年の曾根丘陵の風景

さて、福岡県教育委員会が昭和40年に平原遺跡の調査風景などを撮影した航空写真は合わせて24枚あるが、そのうち、曾根古墳群に関連する写真は16枚である。

写真1は、古墳が集中する曾根丘陵の中央部を南西方向から俯瞰した写真である。丘陵上には畑地が広がり、農家の屋敷とこれを取り囲む防風林が点在する。丘陵を縦断している直線道路は現在の市道曾根一山北線である。

ちなみに、左後方には糸島半島の山岳地帯、写

真中央には糸島平野ののどかな田畑風景、その右背後に見える海は博多湾である。

曾根古墳群に目を移すと、右手前に狐塚古墳、中ほどに銭瓶塚古墳、その左背後にワレ塚古墳、さらにその後方に先山古墳の姿を確認することができる。

狐塚、銭瓶塚、ワレ塚古墳については、昭和56年以後、たびたび発掘調査が行われ、古墳に関する情報の充実度が増してきた。

#### (2) 狐塚古墳

写真2は、狐塚古墳を真上から写した写真である。この写真では、墳丘の南と北側に周溝の痕跡が窪地として残存していたことが確認できる。

しかし、墳丘の西裾（写真の墳丘左側）では、雑木林がやや西向きに張り出していて、平面形は帆立貝形前方後円墳のようにもみえる。このこと



写真2 狐塚古墳（直上から・1965年撮影）





が、当古墳を長く前方後円墳と誤認する要因となったと考えられる。

1981（昭和56）年には、前原町教育委員会による確認調査が実施され、直径32m、高さ3.8m、周囲に幅5mほどの周溝がめぐる大型円墳であることが確認された（註⑥）。墳丘は3段築盛で各段の斜面に葺かれた葺石も確認されている。

これまで、主体部の位置が明示された墳丘図は公表されていなかったため。改めて墳丘図に主体部平面図を加えたのが第3図である。

墳頂部には南に開口する古式の横穴式石室と竪穴式小石室が並んで構築されていた。竪穴式石室は石材が完全に抜き取られていて残っておらず、詳細は不明である。横穴式石室も天井石は抜き取られ周壁も大きく損壊していたが、幸い下半部と袖部が残存しており、割石を小口積みした長さ3.2m、幅1.7mの石室であることが確認できた。石室と外部は墳頂から斜め下方に向かうスロープ状の墓道でつながり、石室の袖には長方形の板石を両脇に立てて袖部を仕切る。玄室と羨道の間に段差があるのが特徴である。

石室の床面には結晶片岩の板石を「コ」の字形組んで3区に仕切った屍床が組まれていた。

当該地方の石室としては、丸隈山古墳、釜塚古墳と同一系譜上に位置づけられる石室であるが、前二者と比較すると、周壁の板石材が厚みを増し、石積みがやや相いところが前二者よりも後出的な要素と捉えられ、5世紀第2四半期頃の築造と考えている。また、石室の規模が一回り小型であることは前二者との間に階層的な格差があったものと考えられる。

### (3) 銭塚古墳

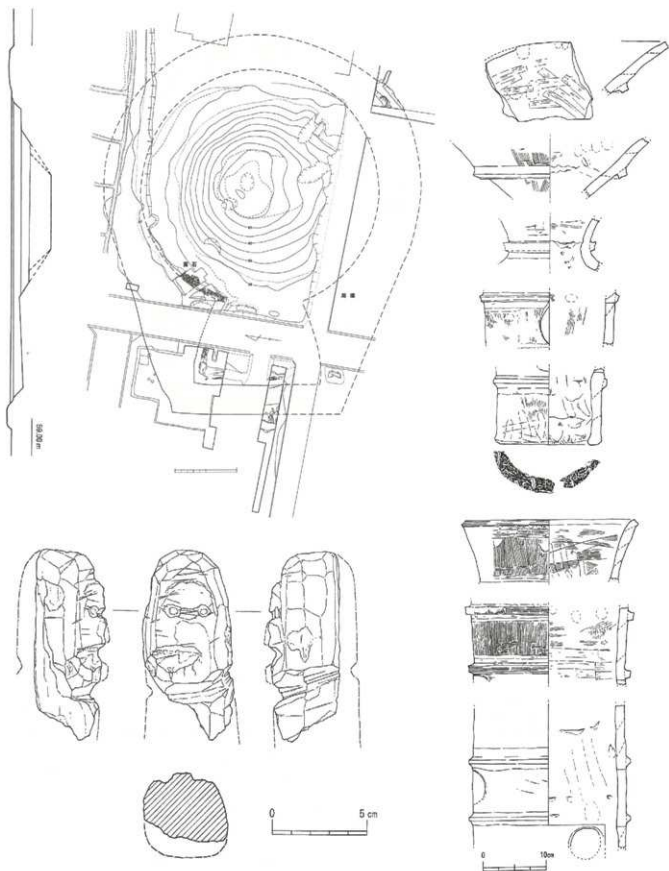
#### ①古墳の概況

狐塚古墳の西100mに位置する前方後円墳である。航空写真撮影時には、すでに前方部はクビレ部付近で道路によって分断され、前方端部も宅地造成などによって破壊が進んでいる様子がうかがえる。さらに東西方向に開削された道路も墳丘の南裾付近を削り寸断している状況が確認できる。

道路に削られた後円部の南東裾部は1985（昭和60）年に行った発掘調査によって周溝を確認



写真3 銭塚古墳（直上から・1965年撮影）



第4図 鉄瓶塚古墳墳丘 (1/600)・壇輪 (1/6)・岩偶実測図 (1/2)

することができた(註⑦)。

墳丘の周囲に目を移すと、後円部の北側には、墳丘裾と畑の間を同心円状にめぐる空地地を見ることができ、これが周溝の痕跡であることを容易に推測できる。周溝の痕跡は後円部東裾付近では、地表面の土色の違いとして追認することができる。

さらに、後円部周溝の東と北東の外縁には周溝を囲むように雑木が茂っていて、周囲よりも若干高くなっていたようである。現状では確認することはできないが、ここに周堤が残存していた可能性がある。将来、詳細な調査を行う際には十分に注意を払う必要があるだろう。

古墳の発掘調査は1981(昭和56)年(註⑤)以後、断続的に4回実施され、主軸方位をN-80°-Wに向け、墳丘全長48.3m、後円部径36m、周溝を含めた全長62.1mの軌立貝型前方後円墳であることが確認された。とりわけ2003(平成15)年度に実施した調査では、左クビレ部~前方部にかけての墳丘の形状を、周溝とともに詳細に確認することができた。

この調査に併せて、墳丘左クビレ部の調査も行った(写真4)、後円部1段目のテラスで円筒埴輪や朝顔形埴輪が原位置を保った状態で残っていることを確認した(註⑨)。また、前方部の周溝内から人物(動物)形埴輪、盾形埴輪など形象埴輪片が出土しており、前方部にも形象埴輪が立てられていたと考えられる(註⑩に同じ)。

これとは別に後円部頂上では1947(昭和22)年に原田大六らによって切妻屋根の家形埴輪が掘り出され、その後、しばらく糸島高校郷土博物館で

保管されていたようである(註⑩)。

さらに、左クビレ部の周溝埋土からは、残存高10.3cmの結晶片岩製の岩偶が出土した。男性像とみられ、目を丸く見開き、歯を剥き出した威嚇の表情を見せることから、古墳の守護を意図した石像とみられ、石人との関連も指摘されている。

なお、埋葬施設については調査を行っていないため不明である。

築造年代については、決め手となる土器等の出土がなく埋葬施設も明らかではないが、出土埴輪が無黒斑で、外形は小型化シタガが扁平化しているものが見受けられる。円筒部が直立し近在のワレ塚古墳出土の埴輪には先行する形態とみられ、5世紀後半の築造と推定される。

#### ②糸島地方の埴輪

ところで、糸島地方において埴輪が出土した古墳は、曾根古墳群の銭瓶塚、ワレ塚両古墳を含め旧怡土郡城で10基、旧志摩郡城で3基の計13基に上る。埴輪が出土した古墳の数は、前方後円墳の分布数とともに周辺地域より突出して多く、高い密集度を示しており、当該地方の古墳文化の特色の一つである。

また、九州における埴輪の本格導入期の指標資料と位置づけられる鶴崎古墳を皮切りに、6世紀前半の今宿大塚古墳にいたるまで、継続して製作されているのも特徴であり、その概略について少し触れておきたい。

当該地方の埴輪の変遷を古墳の築造時期をもとにまとめたのが第5図である。報告されている埴輪は、発掘調査によるものばかりではないので、各古墳における出土傾向を細かく比較検証するこ



写真4 銭瓶塚古墳クビレ部葦石検出状況(南から)



写真5 クビレ部の円筒埴輪列(東から)

とはできないが、あらしを把握することは可能である。

分布の時間的な変遷をみてみると、元岡池ノ浦、鋤崎、丸隈山古墳など初期の埴輪が出土した古墳は糸島地方東側の今宿湾岸に集中する。その後、旧怡土郡では、周船寺、曾根古墳群の前方後円墳に継続して埴輪が用いられるのに対し、旧志摩郡域では、井田原岡、経塚古墳で使用されるにとどまっており、対照的な分布状態を示している。

器種や製作技法の変遷をみてみると、当該地方で最初に埴輪が採用されたのは三雲築山古墳で、壺形埴輪が出土したのが初例となる。円筒埴輪も出土しているが小片にとどまっていた詳細は不明である。今後の調査による解明に期待が持たれる。

なお、近隣の三雲郡の後古墳では、周溝から大型の二重口縁壺が出土しており、壺形飯器の先行供献例として図示している。

円筒埴輪が本格的に導入されたのは、元岡池ノ浦、鋤崎古墳である。両古墳の埴輪とも薄手で丁寧な仕上げをしているところが共通している。元岡池ノ浦古墳では、三角形透かし孔を有する円筒埴輪と、壺形埴輪の一部が確認されている。

墳丘、主体部の本格的な調査が行われた鋤崎古墳では円筒形、朝顔形埴輪列が墳丘に4段に廻ることが確認され、用いられた総数は400本以上に上ると推定されている。

また、壺形、盾形、靴形、短甲形、円形、冢形埴輪など形象埴輪も多く出土し、その配置を含め、機内地域からの強い影響を感じさせる。

鋤崎古墳で本格化した円筒形・朝顔形埴輪の大量使用は、その後に続く当該地方の首長墳にも継承された。鱗付埴輪(井田原岡古墳のみ出土)、三角形や半円形の透かし孔、最下段の透かし孔などの埴輪を構成する諸要素が、井田原岡、丸隈山、釜塚古墳など後続する首長墳で確認されることもそれを裏付けている。

製作技法について、釜塚古墳までは有黒斑埴輪で、野焼き焼成と考えられるが、兜塚古墳以後は無黒斑埴輪へと変わっており、窯窯焼成が導入されたと考えられる。横山古墳には有黒斑ではあるものの、黄褐色を呈していることから焼成温度の高さをうかがわせ、最下段のタガが消失している点など、窯窯導入に向けての過渡的な様相を垣間見ることができる。

糸島地方の埴輪は、時期を問わず外面の調整はタテハケによる一次調整のみで終えるものが多い一般的で、ヨコハケを施すものはほとんど見られないが、無黒斑埴輪が出土している経塚、銭瓶塚古墳では、ヨコハケを施したものが認められることから、窯窯焼成技術とともに伝播したと考えられる。しかし、ヨコハケ技法は、以後、当該地方で定着することはなく、後続するワレ塚古墳や今宿大塚古墳の外面調整はタテハケの1次調整のみで終える。

九州地方の埴輪の研究は、高橋徹らにより精力的に進められてきた。高橋氏の編年(高橋徹「九州の埴輪について」九州の埴輪その変遷と地域性」2000年九州前方後円墳研究会編)に従えば、銭瓶塚はⅣ期(5世紀後半)、ワレ塚古墳はⅤ期(6世紀前半)に位置づけられると考える。この時期の糸島地方は、周辺地域と比較して前方後円墳の築造数が一時的に減少し、また、埴丘規模も小型化する時期であり、当該地方の政治的地位が大きな変革期を迎えたものと考えられ、当該期の歴史を検証する上で、両古墳は重要な意味を持つ。

#### ④ ワレ塚古墳






















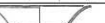







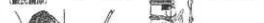










今回発見された一連の航空写真には、ワレ塚古墳を単体で近景撮影されたものが1枚ある。しかし、鬱蒼とした屋敷林で覆われていたため、古墳の形状を写真から読みとることはできない。

昭和56年度に現況の測量調査が行われ、ここではじめて前方後円墳であることが確認されたが、前方部が細く開きがほとんどない特異な平面形を呈していた。この古墳の詳細が明らかとなったのは、2005～2006(平成17)年度に行われた確認調査である(註①)。


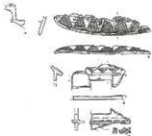
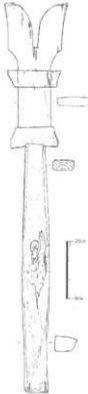


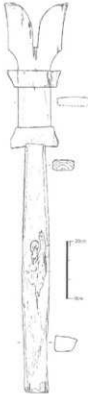




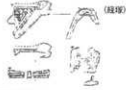



この調査の結果、埴丘全長42m、後円部径30m、前方部長12mの前方後円墳であることが判明した。前方部は著しく締まったクビレ部から扇状に大きく広がっている。

埴丘は南から北に向かって緩やかに下る勾配地に埴丘基底部を水平にして築かれているため、埴丘をめぐる周溝の深さは後円部前面では1.2mほどであるが、前方部側に向かって徐々に浅くなり、前方部前面では消失し、まさに馬蹄形を呈する。前方部では2段の葺石が確認されている。

埴丘には前方部からクビレ部にかけて円筒埴輪が密に配されている(写真⑤)が、後円部での配

遺跡名	発掘時期	層位の 名称	透孔 形状	遺形・遺物	平面図・断面図・透視図	
三浦 山 古墳群	3 期			(三貴部の後) 		
				三A期 		
三浦 山 古墳群	4 期			三A期 		
				三B期 		
三浦 山 古墳群	5 期	有 蓋 塚		三A期 		
				三B期 		
三浦 山 古墳群	6 期			三A期 		
				三B期 		
三浦 山 古墳群	7 期		円形のみ			
						
三浦 山 古墳群	8 期			銅瓦葺 		
						
三浦 山 古墳群	9 期					
						

第5図 糸島地方出土埴輪変遷図 (1/20・写真は縮尺不同)

形 象 描 繪			關 係 資 料
圖 形	家 形	動 物 · 人 物 · 他	
 <p>(圖形)</p>			
		 <p>(圖形)</p>	
			
			
 <p>(圖形)</p>			
			

置状況については調査が不十分で詳細は明らかではない。

しかし、後円部に入れたトレンチでは、埴輪の出土量が極端に少なく、本来、埴輪が前方部を中心に配されていた可能性もある。

前方部墳丘上では、円筒埴輪がコの字状に密に配されていた(第6図)。また須恵器坏、坏蓋、甕、高坏、器台など多く出土し、それらが破損して墳丘斜面や裾部に転落した状況がうかがえ、また、馬形埴輪や人物埴輪片なども出土していることから、前方部において、埴輪を用いた祭祀が行われていたものと考えられる。円筒埴輪の中には上端が内湾して取束した異形のものもある。韓国光州広城市の月桂洞2号墳の埴輪形土製品との類似性

が指摘されており(註⑩)、その関連が注目される。

後円部では、頂上から南にかけて大きな盗掘・陥没坑があり、おそらく横穴式石室の石材が抜かれて大破したものと考えられ石室が、主軸方位に平行して南側に開口していた可能性が高い。

古墳の築造時期について、墳丘上から出土した須恵器(第6図)のうち、坏のなかにMT15型式のものが認められること、埴輪が無黒斑であることを考慮して、6世紀初頭の築造と推定している。

#### (5) 先山古墳

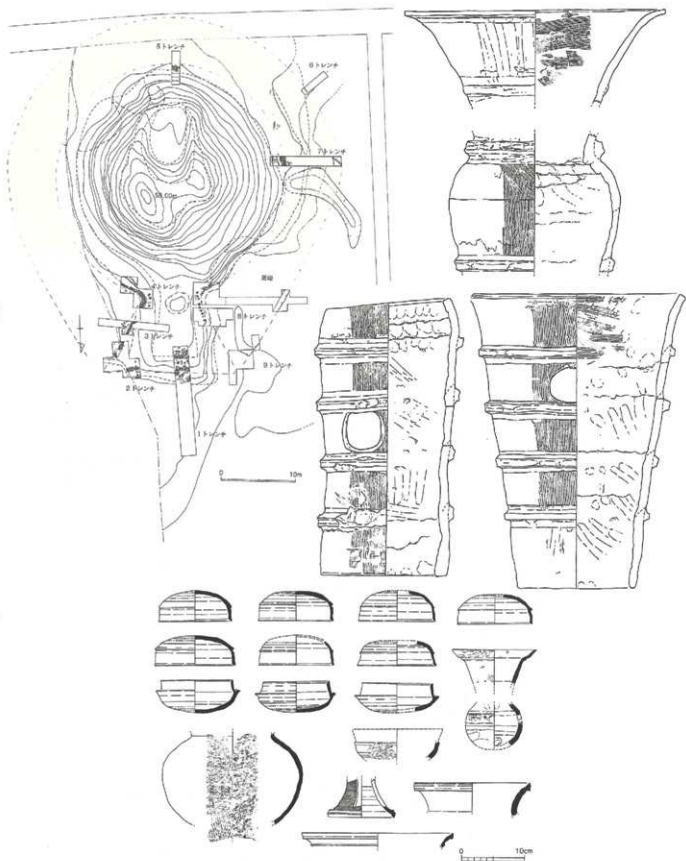
##### ①立地

先山古墳は、ワレ塚古墳の北100mに位置していた前方後円墳で、現存する曾根古墳群の最北端



写真6 ワレ塚古墳発掘調査時全景(真上から・2005年撮影)





第6図 ワレ塚古墳墳丘 (1/500)・埴輪 (1/6)・須恵器 (1/6) 実測図

にあたる。この古墳から北に向かって丘陵の勾配が急にきつくなり、傾斜地となっているので、首長墳の築造環境としてはあまり適した立地とはいえず、この北には他に古墳があったという情報もないことから、この古墳が、首根古墳群の最北端に位置していたと考えてよい。

#### ②遺存状況と墳形の復元

写真7は、垂直写真を拡大したものである。一見ただけで前方後円墳であることがわかる。撮影が行われた1965（昭和40）年当時は、まだ、墳丘が比較的良好的に残存していたことがうかがえる。

古墳の東に延びるやや幅広い道路（R1：現市道曾根一山北線）は、南北に新設された公道であり、その法線は現在とほとんど変わっていない。これを基準に墳丘の主軸方位を測ってみると概ねN-58°-Eに向けられていたことがわかる。

R1道路から西に派生する道路（R2：現市道曾根中27号線）が墳丘裾を削った断面の状況を俯瞰写真（写真2）を拡大して観察したところ、墳丘2段目の法面の勾配は緩やかにみえる。道路が交差点から西に向かってなだらかに隆起している状況が確認できる。また、前方部は後円部一段目テラス面と同じ高さで低平のまま墳端部まで伸びていたようである。墳丘の裾は後円部ではP1～4を通る円形、前方部はP4～8を通る台形のプランを想定した。一方、「地名表」には、先山古墳に「周濠」が存在したことが記録されている。この写真では、土地の子細な起伏まで読みとることはできないが、想像たくましくして墳形の復元を試みたのが第7図である。

前方部の北西角の北側に土地区画線と明らかに方向を異にし、直角に曲がるコーナーを有した植栽帯が観察できる（第7図1）。再び写真2で確認



写真7 先山古墳（真上から・1965年撮影）

してみると、この植栽帯は建物1の背後に土塁状の高まりとして写し出されており、あたかも建物がこれを風除けとして利用していたように見える。他にも古墳の周囲に点々と高まりが残っており（第7図2、3、4）、これらを繋ぎ合わせると馬蹄形にめぐる周堤を復元することができる。

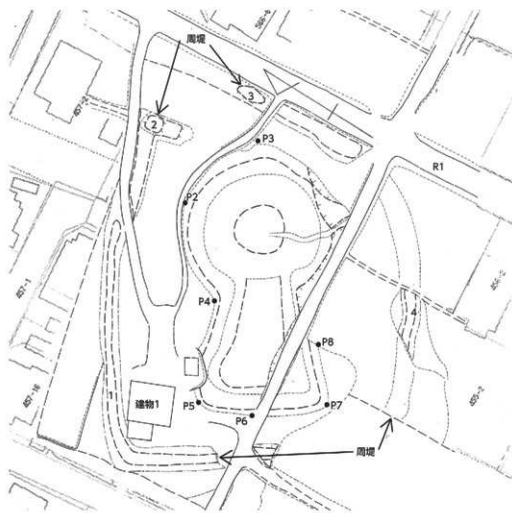
この写真で確認できる土地境界を現在の地籍図と照合してその規模を推定してみると、周堤を含めた幕域全長60.5m、幅52m、墳丘全長43m、後門部径25m、前方部長17.5m、クビレ部幅15m、前方端部幅25mの概数値が得られた。

### ③古墳の築造時期

柳田康雄氏は、先山古墳が破壊された跡地に巨石が置かれていたことを記憶している（註⑬）。巨石を用いた埋葬施設であれば古墳時代後期、とりわけ6世紀中葉以後に築造された横穴式石室である可能性が高い。また、馬蹄形の周堤をめぐらす当該地方の前方後円墳としては、今宿大塚古墳や東二塚古墳があり、これらも6世紀代に築造された前方後円墳である。

また、「地名表」では古墳を後期と推定した根拠として須恵器の採集を挙げている。

博物館には大神邦博が採集した「先山」の注記がされた須恵器がある（註⑭）。胴部に回転掻目が施され、口縁端部が丸く肥厚している特徴はTK10型式以後に相当し、上記の古墳推定時期とも大きな齟齬はない。



第7図 先山塚古墳略図 (1/600)

## (6) 高上大塚古墳

### ①航空写真に遺された高上大塚古墳

曾根丘陵の南奥、標高70mほどの高所を撮影した写真の中に円墳状の叢林がみえる。周辺の土地区画から割り出した叢林の直径は概算で30mほどになり、狐塚古墳の墳丘径に近い数値となった。

この地点を、前原町文化財地図（第2図）と照らし合わせると、ちょうどこの地点に前方部を西に向けた前方後円墳の表示があり、高上大塚古墳とされている。ちなみに古墳周辺の小字名は「大塚」であるが、大字は「井原」で、高上地区には「大塚」の地名はみられない（写真8）。

付近には他に古墳の表示がなく、仮りに円墳だったとすれば、畑地の中に独立して残る30m超の大型円墳を分布調査で見落とすとは考えられず、この円丘が高上大塚古墳の後円部と考えていだろう。

円丘の左（西）側（写真9左上）には前方部の

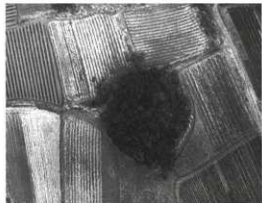


写真9 高上大塚古墳（上から・1965年撮影）

残丘とみられる小さな突出部がみられ、分布図上の東西方向に主軸を向けた前方後円墳の表示とも符合する。1915（大正4）年に作製された地籍図（第11図左）には、円丘から西に長さ15mほどの前方部状の張り出し区画が認められた。これが前方部の一部とすれば、全長40mを超える前方後円墳であったことになる。



写真8 高上地区周辺の地形（真上から・1965年撮影）

②高上古墳出土の鹿角刀装具

高上大塚古墳からの出土品と確定できる資料は残っていないが、関西大学博物館に同墳出土の可能性が高い資料が所蔵されており(註⑮、⑯、⑰、⑱)、これまでたびたび紹介されてきた。雷山村(高上)から出土したとされる2点の鹿角刀装具(MY-K2142(註⑲、⑳))である。

この資料は、大阪毎日新聞社の第五代社長の本山彦一が収集した「本山コレクション」のひとつで、入手経緯や出土状況などの情報については、「本山考古要録」(以下「要録」と「近江国高島郡水尾村の古墳」所収の「日本発見刀剣鹿角装具集成」(以下「集成」)の2書の記載が参考になる。

『本山考古要録』抜粋

隠刃太刀 腐蝕

1. 「明治39(1906)年六月二日福岡県糸崎郡雷山村字高上山上古墳発掘 鈔 鹿角 福岡市江藤正澄 蔵(本山) 松陰○ 蔵ニ帰ス」

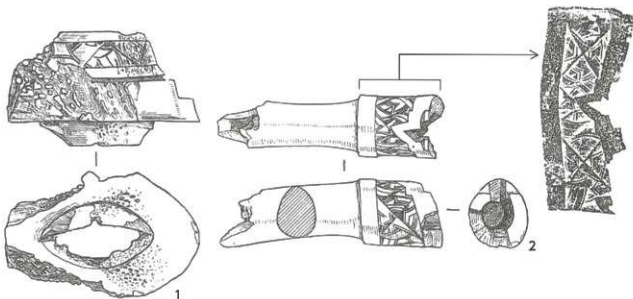
2. 「福岡県糸崎郡雷山村山ノ奥にて所得 小刀柄 鹿骨 左之図 江藤正澄蔵(本山) 松陰へ帰ス」

「日本発見刀剣鹿角装具集成」(「近江国高島郡水尾村の古墳」所収 抜粋)

遺跡 圓塚、石室

搬出遺物 刀身3 劍身5 鉄鍔23

漆塗冠帽残骸1



第8図 本山考古要録所収の高上出土鹿角刀装具(2/3・文献⑲より転載・一部加筆)

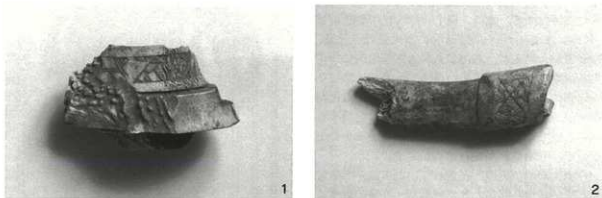
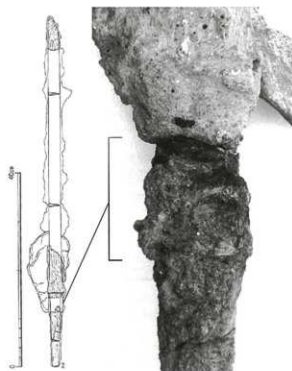
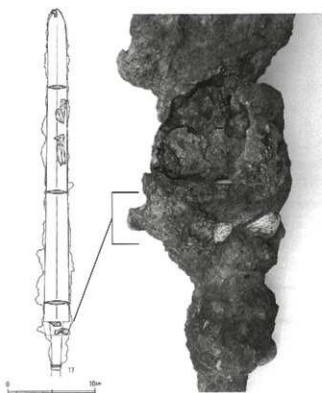


写真9 高上出土鹿角刀装具(1987年撮影)



第9図 西堂四反田古墳出土鉄大刀(左)と井原南田古墳出土鹿角装鉄剣(右)

発掘者である江藤正澄は、幕末から明治期に活躍した福岡県の国学者で、考古資料の収集家としても知られている。明治44(1911)年が没年であるので、この刀装具の発掘が江藤の晩年に行われたことがわかる。

高上地区は、曾根丘陵の南西基部、雷山川を見下ろす台地上に位置する一塊の小集落である。前掲文献の中では、高上古墳と集落との位置関係は明らかではないが、高上大塚古墳が高上集落の北東500mの山手に位置し、集落より15mほど高い集落を見下ろせる高所にあるので、『要録』に記された「山上」、「山ノ奥」という立地の記載内容にも符合する。また、高上大塚古墳の所在地は「井原」であるが、井原地区の本集落は、遠く、外来者から見ると、あたかも高上集落地内に所在する古墳と誤認されやすい場所である。集落はその南側にも山間部を抱えていて、こちらにも後期古墳が確認されているが、いずれも6世紀後半以後の古墳で、鹿角刀葬具副葬の隆盛期から少し下るので、立地の候補からは外してよい。

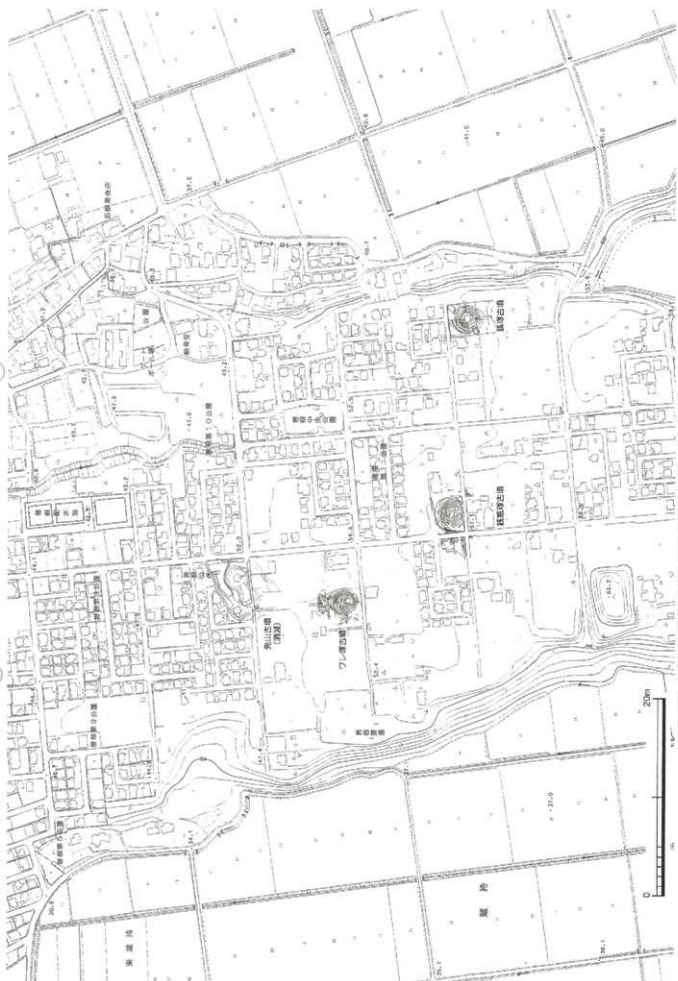
古墳の墳形が円墳と記されていたのは、発掘時点ですでに前方部が大きく損壊し、写真のように円墳状を呈していたか、あるいは前方部が当地に

特有な低平であったために前方後円墳と認識できなかった可能性も考えられる。

主体部について詳細は記されていないが、当該資料がほとんど土汚れがみられないのに水銀朱の付着が顕著であること、有機質の資料であるにもかかわらず腐朽・腐蝕などによる劣化損傷が少ないことから、発見された遺構は盗掘を免れて良好に残存していた石棺ないしは石室であったことが



写真10 雷山出土双龍環頭大刀の柄頭部(ほぼ原寸)



第10回 曾根古墳群周辺の状況と古橋の配置 (1/4000 平成16年2月)

うかがえる。報告文には漆が付着した製品も残存していることが記録されているのも、このような出土環境によるものであろう。

2点の装具の記載内容の詳細には異なる点もあるが、「集成」ではいずれも高上古墳の出土として、当初から同一の古墳（高上大塚古墳）からの出土品と考えられていたようだ。

なお、「集成」にみられる漆塗短剣欠について、鉄鍔がまとまって出土していることを考慮すれば有機材を用いた盛矢具を認識した可能性も考えられる。

さて、第8図に示した装具1は、鉄剣の柄縁で、長さ4.5cm、幅7.6cm、厚さ5.0cm。側面観は台形で、柄元に直弧文がめぐる。柄と直交して装着される柄縁装具は別作りとなっていて、連結部は装具と装着するために平滑に切断され、中央に楕円形の装着孔が穿たれている。

刀装具2は、小刀の柄とされるもので、残存長8.85cm、幅2.05cm～2.6cm、厚さ1.65cm～2.4cmを測る。柄間と段を有する柄頭が一体的に造り出されていて、柄頭部には直弧文がめぐる。

これら鹿角刀装具の盛行時期は、5世紀後半と考えられているので、高上大塚古墳の時期も概ねこの時期に相当すると考えられる。

なお、糸島地方で鹿角刀装具が確認されている古墳としては、他に西堂四反田1号墳（大刀）と井原南田古墳（剣）がある。いずれの資料も保存状態が悪いので詳細はわからないが、双方とも高上大塚古墳に近い怡土平野南部に所在する、横穴式石室を主体部とした5世紀中～後半の円墳である。副葬品として、鉄刀、鉄剣、鉄鍔など武器が副葬されているなど共通点が多く、被葬者に対し、武力に秀でた首長層のイメージをいさぐ。

鴨稲荷山古墳の報告書にはもう一つ気になる資料集成が掲載されている。「日本発見刀剣環頭集集成」で、このなかに雷山（村）から出土した双龍環頭大刀の柄頭が掲載されている（写真10）。口を小さく開き玉を噴む二匹の龍が背中合わせて環頭内に配された意匠は、同種の大刀には珍しく、6世紀前半に舶載されたものと推定されている。出土した古墳の詳しい情報がなく、現在は資料の所在も不明であるが、高上大塚古墳に近在する当該地域の首長墓と考えられ、今後とも注意が必要であろう。

#### 4. おわりに

昭和40年3月頃に撮影された曾根丘陵の古墳群の航空写真の観察を通して、当該地域の古墳の調査成果の検証と、墳丘が消失した先山古墳、高上大塚古墳の検討を試みた。

これまでの成果をもとに曾根丘陵上における古墳の築造順序を整理すると、狐塚（5世紀前半）→銭瓶塚（5世紀後半）→ワレ塚（6世紀初頭）→先山（6世紀後半）の順に築造されたものと推定される。これに怡土平野の基地の首長墳である三雲山、薬山古墳、さらに後続する西堂古賀崎古墳なども加えると、4世紀から6世紀にかけての当該地域の首長墓の築造の流れを概ね復元することができる。

立地環境でみると、曾根丘陵は怡土平野の中央部に位置していることが重要である。この丘陵の中央部に築造された古墳の被葬者達は、旧怡土郡東部の瑞梅寺川と雷山川の両水系の平野に影響力を有した首長であったものと考えられる。

狐塚～ワレ塚古墳には葺石が施され、銭瓶塚、ワレ塚古墳では墳丘上に形象埴輪を含めた地輪の樹立が認められるなど、規模はさほど大きくはないが、地域首長の古墳としての条件を備えているといえる。

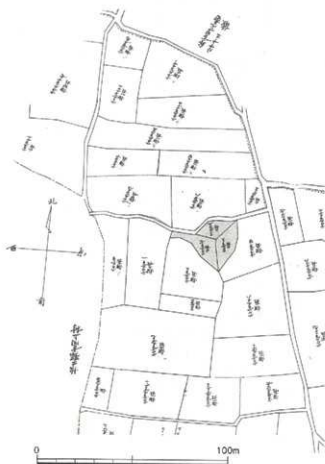
なお、高上大塚古墳は概ね5世紀後半に築造された横穴式石室を主体部とする前方後円墳と考えられる。ただし、曾根丘陵上の他の首長墳とは地理的に離れ、雷山川流域への眺望を強く意識した選地がうかがわれることから、曾根古墳群グループとは異なる雷山川水系に依拠した首長墳であったと考えたほうがよいかも知れない。

なお、高上大塚古墳の所在地は大字井原に属すること判明したが、これまでの周知状況を勘案し、従来どおりの呼称を使用してしかるべきと考ええる。



【註】

- ①1793 加藤一純、鷹取周成【共編】『筑前國禮風土記附録』
- ②1952 「福岡県糸島郡一貫山村田中鏡子塚古墳の研究」福岡県教育委員会
- ③1974 「前原町文化財地名表」前原町教育委員会
- ④1963 日高光子 水崎しのぶ「曾根原2号墳出土円筒埴輪」糸高文林12 糸島高校
- ⑤1982 柳田康雄「三雲遺跡Ⅲ」福岡県文化財調査報告書第62集 福岡県教育委員会
- ⑥1984 鍋島さとみ「曾根遺跡群Ⅲ」前原町文化財調査報告書第14集 前原町教育委員会
- ⑦1988 林覚「曾根遺跡群Ⅳ」前原町文化財調査報告書第27集 前原町教育委員会
- ⑧1982 林覚「曾根遺跡群」前原町文化財調査報告書第7集 前原町教育委員会
- ⑨2004 牟田華代子「銭原塚古墳」前原市文化財調査報告書第87集 前原市教育委員会
- ⑩1950 「糸高文林」創刊号 表紙裏面版として復元された家形埴輪の写真が掲載されている。
- ⑪2006 瓜生秀文「ワレ塚古墳」前原市文化財調査報告書第88集 前原市教育委員会
- ⑫2006 太田博之「南方後円墳出土の埴輪と木製品」『世界遺産の世界』21号 国際興業株式会社文化事業部
- ⑬柳田康雄氏から御教示いただいた。
- ⑭1991 岡部裕俊「平原岡辺遺跡(2)」前原町文化財調査報告書第36集 前原町教育委員会
- ⑮1935 末永雅雄編「富民協会農業博物館本山考古室要録」岡書院
- ⑯1923 浜田耕作 梅原末治「近江国高島郡水尾村の古墳」京都帝国大学考古学研究所報告第8冊 京都帝国大学
- ⑰1973 「考古学資料図鑑」関西大学
- ⑱1987 前原町教育委員会「伊都歴史資料館」
- ⑲2004 「関西大学博物館の名品」関西大学博物館
- ⑳2010 「関西大学博物館蔵本山彦一蒐集資料目録」関西大学博物館



第11図 高上大塚古墳周辺地籍図(左:1915年調製図を一部改変)と現況図(右:2013年調整図に地籍図から推定した古墳の位置を表示したもの)



1.平原遺跡発掘調査風景俯瞰（東上空から）



2.平原遺跡発掘調査風景近景（南西上空から）

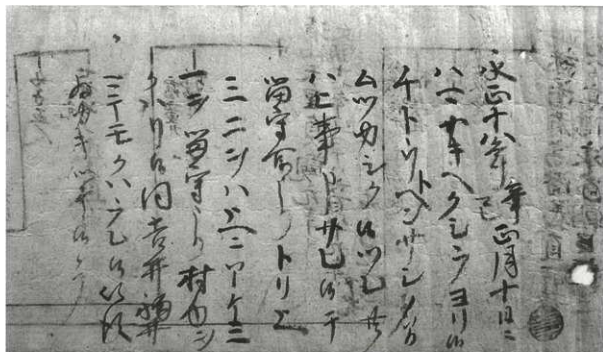


3.平原遺跡発掘調査風景全景（直上から）

写真11 平原遺跡発掘調査風景（1965年撮影）



【写真六】  
【系図】(三号) 羅目裏花押(第一紙・第二紙間)



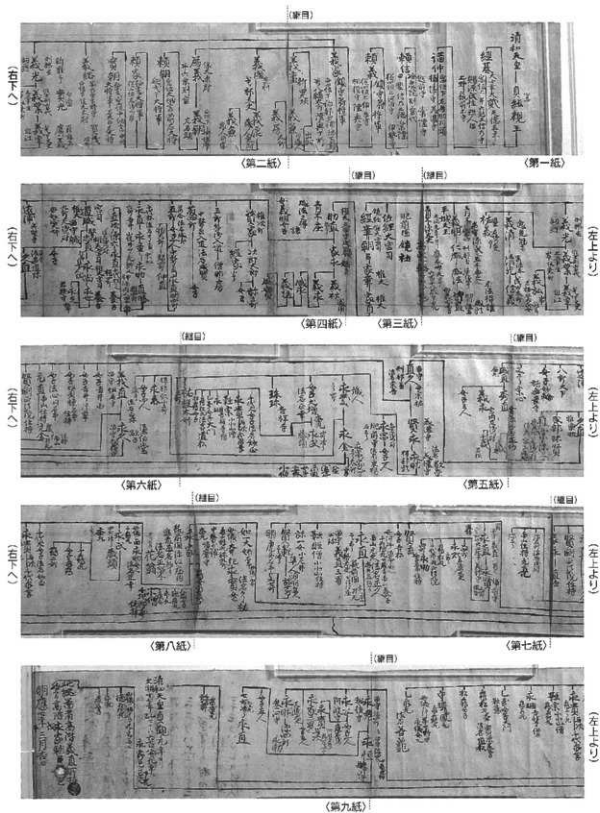
【写真七】【贊】(系図)(三号) 第九紙紙背



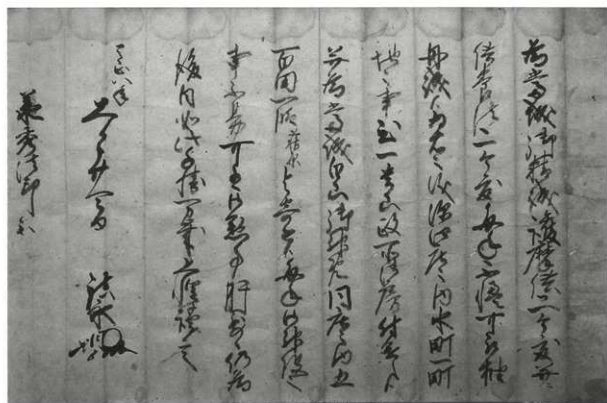
【写真九】(系図写)(四号) 奥書(部分)



【写真八】(系図)(三号) 奥書(部分)



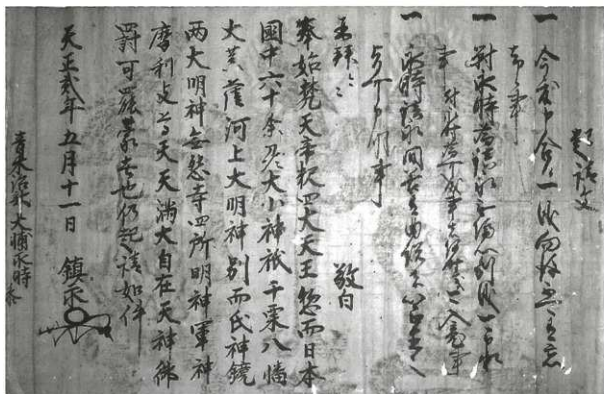
【写真五】(系圖) (三号)



【写真三】草野鎮水券遺状（二号）



【写真四】鹿笛譜（赤白桃李花・部分）（系図）（三号）第二紙紙背



【写真一】草野鎮永起講文（一冊）



【写真二】草野鎮永起講文（一冊）裏

- (8) 川邊昭二「筑後津守寺の建立と草野氏」(阿氏九州中世史の研究)吉川弘文館、一九八三所収、初出一九八二。また、九州大学蔵草野氏文書についての解題として、阿氏、九州大学蔵の中世文書(「古文書研究」四九、一九七〇)がある。
- (9) 小川信「筑後府中の成立と一宮高良氏」(阿氏、中世都市「府中」の展開)思文閣、二〇〇一、第二編第四章。初出時の原題は「筑後府府の変遷」と一宮高良氏―「高良良記」を一素材として―(二)「(政治経済史学」三三、三三二、四、一九九二)。
- (10) 草野鎮水関係の史料としては、鶴田文書、横信文書など肥前関係の文書のほか、鶴井文書や兒玉福探集文書所収の筑前関係の史料に、宛給文書が若干見られる。
- (11) 「鶴田家文書(庶流家)」(佐賀)六所収、四一〇号。
- (12) 「鶴田家文書(庶流家)」(佐賀)六所収、二一〇号。
- (13) 「兒玉福探集文書」二所収。
- (14) 「永野御書キ物抜書」(武庫市図書館・歴史資料館編「戦国の九州と武庫」後藤賢昭)家信の時代(平成二十一年度武庫市図書館・歴史資料館特別企画展)図録、二〇一〇所収、堀本一繁氏編録、一六七号。
- (15) 堀本一繁「龍造寺氏の戦国大名化と大友氏前支配の消長」(「日本歴史」五九八、一九九八、加藤幸「竜造寺体制の展開と知行構造の変質」(九州文化史研究所紀要)第二十六号、一九八一年)。
- (16) 六月十一日付津尾大友家加判業進書状写(「悉状写」)「大分県立津尾書大友宗麟資料集」四巻(四七〇号)。
- (17) 二月十一日付津留田因幡守(勝)宛戸次鑑連書状(鶴田家文書(續流家))二佐賀)七所収、三三〇号。
- (18) 正月十八日付筑紫頼朝宛大友氏加判業進書状(鶴田家文書(續流家))二佐賀)七所収、二一〇号。
- (19) 「鶴田家文書(續流家)」(佐賀)七所収、四〇〇号。「鶴田家文書(庶流家)」(佐賀)六所収、三三八号。
- (20) 天正二年正月十八日付草野鎮水起請文書(「永野御書キ物抜書」)一六三三号。
- (21) 「藤岡文書」(福岡県文化会館「福岡県古文書等所在確認調査報告書」一九七七)所収。
- (22) 「鶴井文書」(福岡県史「近世史料編」福岡藩町方(二)、一九八七)所収、一八号。

- (23) 元龜二年六月朔日付草野鎮水宛行状(前掲註(21))。
- (24) なお前巻として、「賀山集落では現在も、九月十六日に二丈岳山頂の白山権現を祀る例へ参拝する「二丈岳神事」とよばれる行事が行われている(宮岡真央子「年中行事」(「興隆寺八坊」第五章「集落調査」三二))。
- (25) 天正六年十二月廿六日草野鎮水起請文書(「永野御書キ物抜書」一六四四号)。
- (26) 同八年十一月五日草野鎮水起請文書(「永野御書キ物抜書」一六二〇号)。
- (27) 「妙音寺文書」(佐賀)二八所収、二七号。
- (28) 「妙音寺文書」(佐賀)二八所収、二七号。
- (29) 「妙音寺文書」(佐賀)二八所収、二八号。
- (30) 斯かる事情を考慮すれば、料紙に使用されている能備請および寛は疑はれずに關係するものであった可能性も想定され、その点については今後の課題としたい。
- (31) 同家國中、義直の二男、および三男、はいずれも「水直」となっている。戦國中には草野氏の奉行的活動をしている留守宮内大輔頼信なる人物が見え(前掲註(13)、永祿八年二月廿八日留守頼信付付、世襲された職を以て称するようになったものと考えられる)。
- (32) 二丈町教育委員会「興隆寺八坊」に全文が紹介されている。この史料は、「賀山天台大願講を組織する家々の共同所有の形をとっており、その年の講を受け持つ家に持ち回りで保管されている。
- (33) 古川秀幸「講組織」(「興隆寺八坊」第二章「天台大師講」三)。
- (34) 九州大学蔵草野文書(久留米市史、第七巻資料編古代、中世、一九九二)三三〇号。
- (35) 前掲註(8)(川添一九八三)。
- (附記) 本稿作成にあたっては、佐伯弘次氏(九州大学人文科学研究院教授、堀本一繁氏(福岡市博物館)、ほか多くの方々にご教示・ご指導を賜りました。また、史料調査にあたりお世話になった青木ハル工氏、調査を助言いただきました木村忠夫氏(九州産業大学名誉教授、糸島市文化財保護委員)はじめ関係各位にこの場をお借りして心より御礼申し上げます。

朝臣□之」の箇所には意図的に字を判読できないよう損傷させたと思われる箇所があり(写真八)、近世のものと思われる黒印の痕跡がある。この黒印は右行の「高階義直所持」の文言に捺された黒印と同様で、しかも四号系図にある印とも同一である。四号の系図も全く同様に手が加えられており(写真九)、後世意図的な抹消が行われた可能性が考えられる。なお、系図中には「青木名字源氏也」「青木庄」など、青木氏との関係を窺わせる書入れの箇所があるが、この点も併せて検討する必要がある。

三行系図の作製時期はその内容成立より極端に下るとは思われないうが、少なくとも近世に何らかの手が加えられていることは疑いなく、史料の裏付けのない現状においては、本系図の伝来をもって高階氏と青木氏の系譜上の関係性を認めるには慎重になる必要があるだろう。

### おわりに

天正初期、草野鎮水は龍造寺氏の圧迫に晒される中で家中の結束を図り、また、近隣神社との関係性を維持しつつ領主的活動を展開していた。当該期の肥前草野氏の、本拠地肥前松浦郡以外での活動については、これまででも怡土郡西部での活動の跡がわずかに知られていたが、今回紹介した史料はその新たな情報を提供するものである。当該期の北部九州を取り巻く政治情勢と併せて見ていくことによって、草野氏の存在形態を考えていく際の手がかりになると思われる。

また、怡土郡深江庄内の土地処分に見られる、筑前・肥前に跨る草野氏の経済基盤と地域支配の一端を示す点も重要である。弘安三年六月八日藤原水基惣領帳案に見える草野氏の所領として、筑前国怡土御庄内福井村惣領田地在家山野河海等が見え、早く怡土郡西部に経済基盤を有していたことは既に指摘されているが、戦国末期に深江庄内に肥前草野氏の所領が存在したことは確実であり、それが如何なる広がりをもたらし、また鎌倉期以降の連続性として捉えることが可能であるのか等、検討の必要があるだろう。

今回紹介した青木家文書は、点数としては比較的少ないながらも、多様な分析が可能な小岐的な史料といえる。特に、これまで十分な研

究の蓄積のない草野鎮水の発給文書が確認されたことは、戦国期の当該地域の政治史を考える上で有用な事例となり得てであろう。加えて、雅楽譜の伝存事例として、また、当該期の神社や夷範寺といった組織、領主層の系譜や地域社会の構造・実態等についても、興味深い情報を提示する。

以上、甚だ不十分な検討ながら、新出史料の紹介を主眼として「青木家文書」所収中世史料について述べてきた。当史料に関しては、今後、政治史・宗教史・文化史等、多様な観点からのアプローチで研究の進展が期待される所であり、本稿がその一助となれば幸いである。

### 註

- (1) 二丈町教育委員会「夷範寺八坊と天台大師講」(二丈町民俗文化財調査報告書第六集、二〇〇八、以下「夷範寺八坊」と略記。この時の調査で発見された史料の一部(天正八年十一月廿四日付草野鎮水寄進状)については、同報告書に紹介されている。西谷正浩「古川氏(古文書資料)」(夷範寺八坊)第三章「天台大師講」四。
- (2) 日原益軒「筑前国松風土記」巻之二十二「怡土庄」。
- (3) 古川秀幸「夷範寺の歴史」(夷範寺八坊)第二章「位置と環境」二二、同「講題」(同前)第三章「天台大師講」三、古川秀幸「桃崎若輔・宮岡真良子「夷範寺八坊」(同前)第四章」。
- (4) 建武五年(二二二八)閏七月十一日付少弐頼高書下「修学院文書」佐賀県史料集成第五巻(以下「佐賀二五」のように略記)所収八号、暦応三年(二三四〇)三月十八日付「色道感感状」中村文書「南北朝建文 九州編二」(四九〇号)、同年三月日蓮正宗正阿闍梨状(重富文書「南北新編文 九州編二」(四九五号)等、地名ないし宗教組織としての用例で用いられており、後述する夷範寺との関係も想定される。
- (5) 二丈町史編纂委員会「二丈町誌 平成版(二〇〇五)」。
- (6) なお、青木家には「青木家文書」三点と別に、中世初期のものも推定されているが、その詳細な経緯が伝来して、中世夷範寺との関係性が想定されている。岡生知子「一書山伝来の書影形鏡像」(夷範寺八坊)第七章「付五」四。
- (7) 「吾妻鏡」文治二年閏七月二日条、八月六日条、および同年十二月十日条。



る。奥書に見える高階義直、高階水家については系図にも見え、「留守」義直三男、永直の子が水家とあり、祖父と孫の關係となる。

妙音寺文書所収の鏡宮社殿棟木銘には、「(二二八)銘に「留守高階直、応永二十六年(一四一九)銘のものに「留守高階義直、永正六年(一一五九)銘の同所収鏡宮島屋建立銘に「留守高階永恒、天文七年(一一三八)銘の同鏡宮二宮修造銘に「留守高階永信」と同永信の名がある。これらの人名は、永正六年の「永恒」まではいずれも本系図に見え、系図奥書の明応七年(一四九八)とこの年代的な矛盾もない。高階(留守)氏の系図と見てよいであろう。

ここで、「留守」は留守職に由来すると考えられ、中世鏡社、及び草野氏家中の組織、構造を考えるにあたって、検討の余地がある。ただし、系図中で義直以降に「留守」と見えるのは、義直嫡男永久一永孝一永恒の系統であり、義直二男永直、三男永直(水家の父)の系統には「留守」と傍書される人物は見えない。

先述の通り、系図末尾には、明応七年(一四九八)の年号と高階水家の名が記されているが、永正十八年(一一五〇)の一件を記した紙背の覚の存在から、当系図自体の「複製」はこの永正十八年以降である可能性が高い。したがって、明応七年に高階水家が祖父義直所持の系図を写したものを、後年更に写したものと見るのが妥当であろう。

#### 四 史料の伝来と諸問題

「青木家文書」の伝来経緯は、史料の評価にも関わる重要な問題であるが、現状においては参照とすべき情報が限定的で、課題も多い。まず、一号および二号の文書は、比較的近い時期の、かつ同一発給者による史料であるが、前者が青木氏の家文書の性格であるのに対し、後者は「大貴山(夷嶽寺カ)の宗教的側面に関わる史料で、その史料の性格は大貴山(夷嶽寺カ)の宗教的側面に関わる史料として、このことを考える上で前提となる問題として、当史料を現在伝来する青木家と、一貴山ないし夷嶽寺との關係性をどのように捉えるか、という点がある。

一貴山地区で伝えられている「天台大師御法事」と題された史料には、近世から近代にかけての七ヶ年分の「天台大師講」講中の連名(交

名)が取められる。そのうち最も古い記録は宝永三年(一七〇六)のものであるが、そこには、政所坊・寂照坊・大教坊・寂光坊・門善坊・覺門坊・華藏坊・尊嚴坊の八坊およびそれを構成する十二家が見え、その構成は近代まで維持されている。ただし、中世の組織と、天台大師講に見られるような近世以降の集落内における組織では、その実態、性格が大きく異なると考えられ、「家」を以て安易にその連続性を持ち出すことには慎重を期したい。例えば、政所坊を号する徳田家は近世一貴山村庄屋を務めた家であるが、近世初頭、当村が唐津領であった頃に唐津より移った入庄屋であり、他の坊号とそれを持つ各家についても、中世からの連続性については一考を要する。青木家と寂光坊(ひいては中世夷嶽寺)の關係性についても、慎重な姿勢で検討する必要がある。

次に、三号の系図に関連して、青木氏と高階氏の系譜的關係の問題がある。このことは、草野氏の家臣団構成を知る上でも重要な問題を含んでいるが、記載される系図の内容については、高階(留守)氏系図としての性格のものであり、本系図が如何なる経緯で青木家へ伝来したのかという点については、高階氏と青木氏の関係も含め、判断としない。

ところで、「青木家文書」には、本系図の写が一点存在する(四号)。この四号系図は、奥書に「宝永七(一七一〇)(寅)年写」とあり、近世に複製された写である。写とされる内容は三号とほぼ同一であるが、体裁や注記の位置など、記としての精度は必ずしも高いとは言えない。一方で紙背の龍笛譜「覚」まで機械的に再現されている点から、「モノ」としての再現(複製)の性格が強い。また、三号の系図にない文言として、奥書の「青木徳房棟(江)進候 青木掃部守水家」という箇所がある。これを素直に取れば、高階水家は青木氏を称し、同じく青木名字の「徳房」にこの系図を与えたことになる。「徳房」はその系図によると、永家女が嫁した永金の子(徳房)であろう。仮にそのように捉えた場合、本系図は青木氏の由緒を示すものと見ることができ、系図の成立・伝来に関して考えた時、四号の元であろう三号系図に当該記載が無く、疑問が残る。さらに、三号系図奥書の「永家



ある。

ここで鎮永は、怡土郡深江庄内の地について処分している。他に元龜二年にも深江庄内の地を宛行っている事例があり、鎮永の怡土郡西部での権益・活動を窺う上で興味深い。

また、「当城」に対する修法と、「当城白山」への神役勤仕が区別して記されており、前半の修法は「一貴山政所御屏」に遣わされている。すなわち「一貴山」として行われる修法であり、当該期の一貴山における宗教組織の存在・活動を明示的に示すものとして注目される。

さらに、ここでの「当城」が何処を指すのかも、鎮永の活動を知る上で重要な問題の一つである。肥前草野氏の本拠である肥前国鏡周辺か、鎮永が一時在城したという二丈岳城（筑前国怡土郡）などが想定されるが、時期的な背景や鎮永の動向も吟味しながら慎重に見極める必要がある。現時点では、二丈岳山頂に白山権現が祀られること、修法を行う「一貴山」との地理的關係などを併せて踏まえると、二丈岳城を指すと考えるのが妥当であるように思われる。

宛所の承秀法印については他に史料を見ないが、これらの内容より「一貴山」の宗教組織（夷織寺を指すカ）の有力者であった可能性が高い。仮にこのことを認めれば、史料が皆無に近い当該期の夷織寺について、その実態を知る手がかりとなり得る貴重な情報となる。

この時期の草野氏を取り巻く情勢についても触れておく。天正六年（一五七八）十一月、大友氏が日向国高城・耳川において島津氏に大敗を喫すると、大友氏領国や周辺の家来が次々と離叛した。この時期草野氏も、それまでの親大友の姿勢から叛じ、龍造寺氏へと接近していく。大友氏の敗戦直後の天正六年十二月、鎮永は即座に龍造寺隆信・鎮賢へ起請文を提出し、「身命之限、無忘却、達相応之馳走、向後母事可得御指南之事」と服従を誓っている。天正八年にも重ねてその旨を確認する起請文を出している。当史料は、それまで大友氏と龍造寺氏の緊密關係の影響を受けていた肥前東部・筑前西部にかけての「堺目」地域が、龍造寺氏主導の新たな政治的秩序へと向かいつつある時期の史料である。

### 三 系図

青木家文書には、中世肥前鏡社の有力者で草野氏被官と見られる高階（留守）氏、あるいはその一族についてのものと考えられる（系図三）<sup>①</sup>、<sup>②</sup>、<sup>③</sup>、<sup>④</sup>、<sup>⑤</sup>、<sup>⑥</sup>、<sup>⑦</sup>、<sup>⑧</sup>、<sup>⑨</sup>、<sup>⑩</sup>、<sup>⑪</sup>、<sup>⑫</sup>、<sup>⑬</sup>、<sup>⑭</sup>、<sup>⑮</sup>、<sup>⑯</sup>、<sup>⑰</sup>、<sup>⑱</sup>、<sup>⑲</sup>、<sup>⑳</sup>、<sup>㉑</sup>、<sup>㉒</sup>、<sup>㉓</sup>、<sup>㉔</sup>、<sup>㉕</sup>、<sup>㉖</sup>、<sup>㉗</sup>、<sup>㉘</sup>、<sup>㉙</sup>、<sup>㉚</sup>、<sup>㉛</sup>、<sup>㉜</sup>、<sup>㉝</sup>、<sup>㉞</sup>、<sup>㉟</sup>、<sup>㊱</sup>、<sup>㊲</sup>、<sup>㊳</sup>、<sup>㊴</sup>、<sup>㊵</sup>、<sup>㊶</sup>、<sup>㊷</sup>、<sup>㊸</sup>、<sup>㊹</sup>、<sup>㊺</sup>、<sup>㊻</sup>、<sup>㊼</sup>、<sup>㊽</sup>、<sup>㊾</sup>、<sup>㊿</sup>がある。

#### ① 料紙・紙背文書

当系図は、紙背に中世のものと思われる雅楽譜（龍笛譜）を有する（写真四）。紙九枚継ぎ、法量は一五・七cm×三一・五・七cmで、特に装頓等はなされていない。第一紙と第六紙と、第七紙と第九紙では料紙の種類が異なっている。第一紙と第六紙はいずれも厚手の良質な楮紙で、紙幅一五・七cmと定型であるのに対し、第七紙以降は明らかに目の粗い楮紙で、紙幅が一五・〇〇一五・三cmと一定しない（表二）。

これは、第一紙と第六紙が、反古となつた龍笛譜の転用であることによる。龍笛譜側の面は天地と各行に界線を持つ。また一定間隔（六行分、約一三・七cm）で強い折れがあることから、元は折本形式であったことが窺える。内容や筆画から、この六紙分の内第三紙・第四紙間、及び第一紙・第二紙間以外の継目は元の継目を無視したものであ

【表二】青木家文書三号（系図）の料紙と紙背

紙数	法量 (cm)	紙背	継目
第一紙	15.7×31.4	龍笛譜（赤白桃梨花・部分） ※第二紙より連続	}裏花押
第二紙	15.7×45.8	龍笛譜（唐曹楽・部分）赤白桃梨花・部分） ※第一紙へ連続	
第三紙	15.7×8.8	龍笛譜（品衣・部分） ※第四紙より連続	}裏花押
第四紙	15.7×45.9	龍笛譜（唐曹楽・部分）唐曹楽/新羅國王 急良女・部分） ※第三紙へ連続	
第五紙	15.7×37.9	龍笛譜（聯合書 序・部分） ※前後連続せず	}裏花押
第六紙	15.6×20.2	龍笛譜（真殿巻・部分）唐曹楽 編踏・部分） ※前後連続せず	
第七紙	15.3×41.0	無	}裏花押
第八紙	15.0×43.5	無	
第九紙	15.0×39.1	【宛】	}裏花押

※龍笛譜の曲目については、田嶋智吉氏（京都市立芸術大学 日本伝統音楽研究センター准教授）、江崎清氏（糸島市教育委員会文化課）の御教示を得た。

摩利支尊天、天満大自在天神御  
顯可龍蒙者也、仍起請如件、

天正式年五月十一日 鎮水（花押）

青木治部大輔水時

天正二年（一五七四）、青木水時に対する起請文である。法量は（縦）二八、一cm×（横）四六、八cm、料紙には彦山牛玉宝印が使用され（二写真二）、前書・神文は、紙に取まる。ここの鎮水の花押は、天正二年五月廿日付鶴田前宛起請文、卯月廿三日付同宛書状等に見られるものと同型である。また、写ではあるが参考として、永禄八年二月廿八日付石田彦七郎宛留守鎮信付写の袖判花押影も同型のもので挙げておく。

宛所となつてゐる青木水時は、天正九年六月十三日付草野鎮水加判衆連署起請文写に名を連ねており、草野氏の通字「永」の使用を許されてゐる点からも、草野氏家中の有力人物であつたと見られる。

内容は、①「今度申合候一儀」について今後忘却しないこと、②水時に対して隔心なく相談すること、③万一、水時と鎮水の間で曲説が生じた場合は、誠実に釈明すること、以上の三ヶ条について確認するものである。基本的な趣旨は青木水時・草野鎮水間の関係性の確認であり、起請文としては一般的な内容で具体性は弱い。ただし、第一条の「今度申合候一儀」が指すところについては一考の余地がある。

元龜年間（天正五年）ころにかけて、肥前では龍造寺氏が急速な台頭を見せ、周辺の家臣はその強い圧力に晒された。草野氏を取り巻く政治的状况を見てみると、元龜四年（天正元、一五七二）ころには、「松浦表、当時鉾桶半之条」という状況にあり、さらにその後「草野表之様体、絶河語候」という事態にまで発展し、草野鎮水は「家中中之」の「逆心」もあつて本拠（肥前国鏡カ）を逐われている。

天正二年五月廿日付で鎮水は松浦郡大河野の鶴田勝・同郡岩屋の鶴田前に起請文を出して協力・連携を確認しているが、その後天正三年

に龍造寺隆信・鎮賢へ起請文を提出しており、龍造寺氏とは一応の和議が結ばれたと見られる。斯かる状況下において、家中の結束を図ることは草野氏にとつて喫緊の課題の一つであつたと考えられ、当史料は草野氏を取り巻く緊迫した政治と草野氏家中の不安定な状況が如実に物語るものといえよう。

（2）草野鎮永寄進状（青木家文書二号）

【史料二】

為当城御精誠、護摩供二ヶ度并、

供養法二ヶ度、毎年不慢可被抽

丹誠候、為右之儀、深江庄之内水町一町

地之事、至一貴山政所御房付遣之候、

并為当城白山御神免、同庄之内五

百田一段、令寄進候、毎年御神役之

事、不易可有御懇事肝要候、仍為

後口如此千勝方威恐惶謹言、

天正八年

十一月廿三日 鎮水（花押）

承秀法印

天正八年（一五八〇）、承秀法印に対する祈禱依頼、および所領寄進を約した寄進状である。法量は（縦）二四、〇cm×（横）三六、七cm、厚手の楮紙で、一部やシミもあるが概して状態は良好である。鎮水の花押は一号のものと同異なり、元龜二年六月朔日付藤瀬織部丞宛行状、天正四年九月廿一日付崎井宗叱宛預ケ状等が同型である。使用期間に重複があり課題は残るが、今後先述に史料を博採・整理の上、検討を期したい。

内容は、「当城」に対する、「護摩供二ヶ度」「供養法二ヶ度」を毎年怠りなく行うよう指示し、その費として深江庄之内水町一町を、「一貴山政所御房」へ進出し、また「当城白山」の毎年の神役に対して御神免として同庄（深江庄）の内五百田一段を寄進する、というもので

【表一】一貴山寂光坊青木家文書目録

No.	文書名	年月日	巻出・作成	発所	形態	法冊 (cm)	内容	備考
1	草野鎮永宛書状	天正五年五月十一日	鎮永(花押)	青木宗前大輔次郎	一紙	28.1×46.8	半合紙一枚の事書三ヶ条	複製・原山牛宗室印
2	草野鎮永宛書状	天正八年十一月廿一日	鎮永(花押)	多野忠印	一紙	24.0×36.7	藤原伊勢の料所、白山御時奥の巻書	
3	〔所題〕	〔書背〕天正七年(9年)三月廿四日	高橋水家頼直口之	—	綴紙(九枚綴)	15.7×315.7	高橋氏(留守氏)系図力	感阿文書有(鎌倉巻、[印] 永正八年藤原伊勢分封一件)一紙(複製影写、複製裏化粧書)
4	〔所題書〕	〔書背〕「鎮永七(6)年」等十一月廿四日	—	—	綴紙(九枚綴)	18.2×358.6	3の写	3の紙質も写す
5	〔印〕	〔書背〕安永四力	—	—	一紙	23.1×30.1	明和七年(享和三年)より安永四年三月廿一日	3に繋連
6	〔所題(手書)〕	〔書背〕	—	—	綴紙(二枚綴)	31.3×262.9	和歌有	複製有、本端(5.0×35.1×5.0)に入
7	〔所題(手書)〕	〔書背〕	—	—	拵本	31.8×47.9	〔吹毛不承~〕	複製有
8	〔所題(手書)〕	〔書背〕	—	—	拵本	31.8×24.0	〔舟出也~〕	7の綴り方、複製・複製有
9	〔所題(手書)〕	〔書背〕	—	—	拵本	31.9×47.1	〔藤土~〕	
10	〔所題(手書)〕	〔書背〕	—	—	拵本	31.8×47.9	〔奥御持付等~〕	複製有
11	〔所題(手書)〕	〔書背〕	—	—	拵本	32.9×48.1	〔藤原大守~〕	複製有
12	〔所題(手書)〕	〔書背〕	—	—	拵本	31.9×48.2	〔仁徳皇后~〕	
13	〔所題(所題)〕	〔書背(代)〕	—	—	一紙	24.5×33.5	大坂書院から皮書印刷場までの系図、メモ書力	

者で草野氏被官と見られる高階(留守)氏あるいはその一族についてのもと考えられる系図である。特に紙背文書として雅楽譜(龍笛譜)の一部が用いられていた点が注目される。また、他に近世の手習と見られるものなどがある。

以下、中世史料の紹介を主眼とし、草野鎮永宛給文書と系図について紹介する。

## 二 草野鎮永宛給文書

青木家文書には、起請文(一)号、(史料一)・写真(一)・写真(二)・写真(三)の二点の草野鎮永宛給文書がある。

草野氏は、中世を通じて筑後国を本拠として北部九州で広く活動がみられる一族である。文治二年(一一八二)、草野永平が筑後国在国司職・押領使を帯び、肥前国鏡社大宮司職に補任されるなどして、筑後や肥前を中心と

した権力基盤を形成していった。史料的制約もあり不明瞭な部分もあるが、ある時期以降、筑後山本を本拠とする草野氏と、鏡社大宮司職を拠りに肥前松浦郡を中心活動する草野氏に分かれていったようである。草野氏については、基礎的研究として川添昭二氏の研究<sup>2)</sup>、また、筑後高良社との関係を中心に論じた小川信氏の研究<sup>3)</sup>などが知られる。

草野鎮永については、戦国末期に筑前国岡土郡高祖を本拠とした圓衆、原田隆種(了榮)の子で、肥前草野氏の養子となったとされる。少なくとも一六世紀後半には肥前東部から筑前西部にかけての活動が一次史料より確認でき、一六世紀後半、大内氏滅亡後に北部九州への影響力を顕著に拡大させていた豊後の大友氏と、肥前国内で急速に台頭しつつあった龍造寺氏の狭間にあって、当初大友氏に属しながらも次第に龍造寺氏の圧迫を受け、天正初期には近隣國衆らと同様龍造寺氏に服した。

しかしながら戦国期の草野氏、とりわけ筑後以外での活動については、十分に解明されているとは言いがたく、一次史料に基づく地道な研究が課題となっている。その点において、本稿で紹介する草野鎮永宛給文書は、当該期の草野氏の動向、ひいては北部九州における政治史を研究する上でも重要な情報を提供するものと考えられる。

### ① 草野鎮永起請文(青木家文書一)号

〔史料一〕

一、今度申合候一儀、向後不可有忘

却候事、<sup>2)</sup>対永時為鎮永無隔心別儀、可申承

事、<sup>3)</sup>村永時為可成事也、村時高入無儀、

一、永時・鎮永則若有曲説者、以正直之

旨、可申明事、

再拜、 敬白

奉始梵天・帝釈四大天王、惣而日本

國中六十余州大小神祇、千乘八幡

大菩薩、河上大明神、別而氏神鏡

面大明神、無怨寺四所明神、軍神

## 〔史料紹介〕

### 一 貴山青木家文書について

— 中世文書を中心に —

中牟田 寛也 (伊都国歴史博物館)

はじめに

本稿は、福岡県糸島市二丈<sup>ニヂ</sup>一貴山<sup>キヤマ</sup>の青木家に伝来する一貴山青木家文書(以下、「青木家文書」)について、その概要を整理、紹介するものである。

一貴山地区は、糸島市西郡、二丈岳(標高七二・一、四m)北東の一貴山川上流の谷あいにある集落で、かつての筑前国怡土郡、その中でも肥前国に程近い位置にある。

平成十九年(二〇〇七)、二丈町(現糸島市)教育委員会と福岡大学文学部歴史学科により、一貴山地区で伝えられる祭礼、年中行事等の民俗調査を主眼としつつ、関連する各種文化財をも広く対象とした集落の総合的調査(「一貴山地区文化財総合調査」)が行われた。この調査の過程において、当地区の旧家青木家に伝来する中世史料を含む史料群の存在が確認され、はじめてその存在が明らかとなった。

その後、平成二十四年に糸島市教育委員会は当史料群の全容確認と、より詳細な情報の記録、整理を目的とした追加調査を実施し、筆者はこれに参加して実見の機会を得た。このときの調査において、中世文書、系図等が確認され、さらに系図紙背より中世の雅楽譜が発見されるなどの成果が得られた。

従来、中世の怡土郡西部の情勢については、史料の制約もあり、近世以降成立の編纂資料等の記述によって語られることが多かった。「青木家文書」は、戦国期に肥前東部から筑前西部にかけて活動した因宗、草野鎮水の発給文書や、紙背に中世の雅楽譜を持つ系図等の新出史料が含まれており、その点においても一次史料としての意義は大きいと考えられる。本稿では、「青木家文書」のうち中世の史料を中心に紹介し、若干の考察を加えることで今後の研究に資することを目的とした。

## 一 史料の概要

### (1) 史料の概要

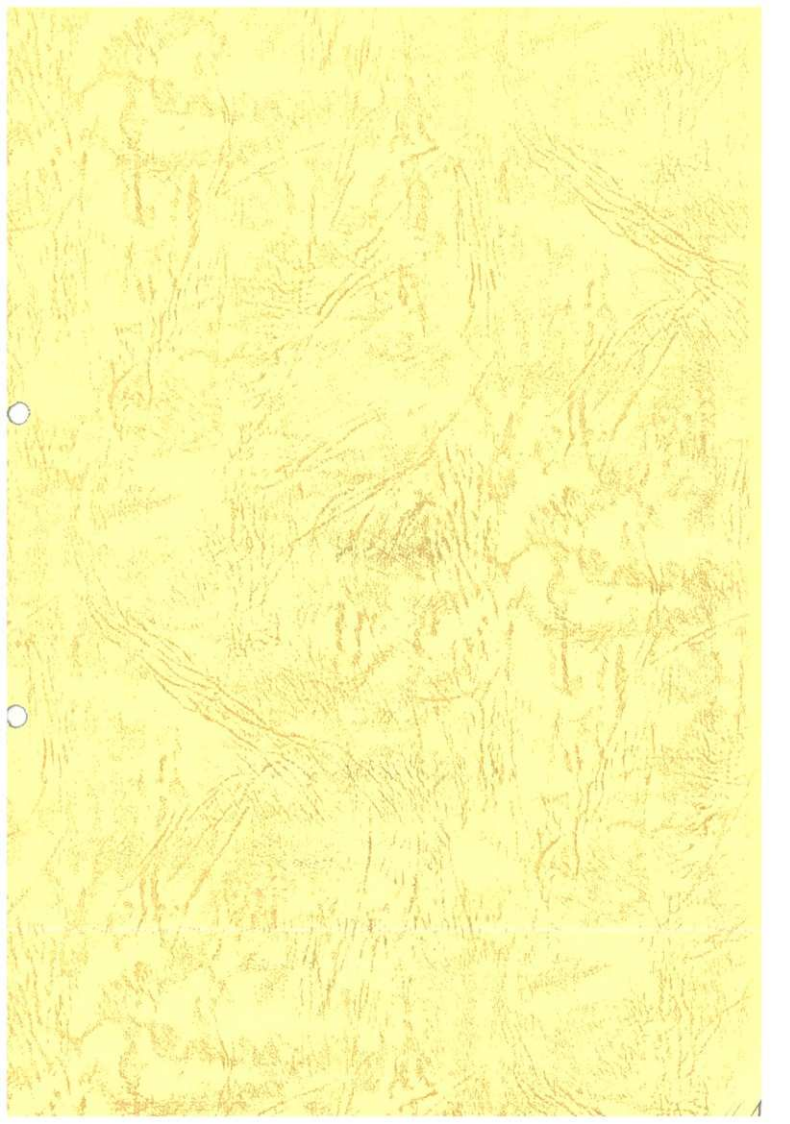
目原益軒『筑前国統風土記』一貴山の項によると、当地区には奈良時代創建の伝承をもち、山岳信仰の展開とともに繁栄した一貴山夷姫寺という寺院があったとされるが、その実態は不明な点が多く、また『筑前国統風土記』が編まれた十八世紀初頭には既に寺院としての実態は衰えていたようである。集落の入口にあたる場所にある仁王門や、現在も数家持ち回りによって行われている天台大師講などはその名残と考えられており、また、集落内には「二〇坊」といって屋号をもち、屋敷内ないし周囲に坊障等の石造物群のある家が複数存在する。これらはおそらくの夷姫寺僧坊の名跡を引き継いだものとされ、少なくとも近世以降、固定した家で世襲的に称されたものようである。本稿で紹介する「青木家文書」を所蔵する青木家も「般若光坊」の屋号を持つ。

一貴山に關しては、占くは南北朝期の史料に「貴香山」と見え、また後世に編纂された地誌・軍記等の記述によれば、戦国期、二丈岳に築かれた二丈岳城(深江岳城とも)に、怡土郡の因宗原田氏に属した深江氏が在したとも、肥前国鏡の草野鎮水が入ったとも伝えられるが、同時代史料に乏しくはつきりしない。その後近世の一貴山村は、慶長年間(十七世紀初頭)に唐津(寺沢氏)領、その後慶安元年(一六四八)に幕府領、同二年唐津(天久保氏)領、元禄四年(一六九一)幕府領、享保二年(一七二七)中津(奥平氏)領と、変遷を辿った。

### (2) 文書の構成

「青木家文書」の構成は、中世から近世の古文書を中心とし、総点数は十三点である(表一)。

一号および二号は、戦国末期に肥前東部から筑前西部にかけて活動した因宗草野鎮水の起請文・寄進状である。三号は、肥前鏡社の有力





## 糸島市立 伊都国歴史博物館紀要

第8号

発行日 平成25年3月31日  
発行 糸島市立伊都国歴史博物館  
〒819-1582  
福岡県糸島市井原916  
印刷 株式会社重富印刷  
〒819-1119  
福岡県糸島市前原東3丁目1番8号  
TEL (092) 322-0191